

## 「牧歌」としての *As You Like It*

高 山 吉 張

*As You Like It* が「牧歌的ロマンス」だという点については、多くの批評家の意見は一致しているように思われる。第一にこの劇は、Shakespeare の他の喜劇と同様、恋愛を主題とする romantic comedy である。Rosalind と Orlando, Celia と Oliver, Phebe と Silvius, そして Audrey と Touchstone, この四組の恋人たちが繰り広げるロマンスは、Arden の森の魅力と相まって ‘holiday humour’ (IV. i. 66)<sup>1)</sup> を醸し出す。それは Quiller-Couch によれば, ‘a dreamy delicious fantasy’<sup>2)</sup> であって、現実の世界の出来事というよりは、夢の世界の出来事である。そして Arden の森は、この夢の世界の背景として、必要欠くべからざるものであった。Quiller-Couch も述べているように、Arden の森の魅力がわからなければ、この劇を理解できないと考える批評家も少なくないほど、それは重要な役割を果たしている。とはいえ、田園風景の直接的描写はほとんどないのだが、自然と動物のイメージが他のどの喜劇よりも多く用いられており、それらがこの劇の牧歌的気分を高めていることは Spurgeon が指摘している通りである。<sup>3)</sup> *As You Like It* を牧歌的だとする考え方は、Arden の森を一種のアルカディアと見ることによって成り立っているように思われる。それはまた、宮廷に対する Arden の森、都会に対する田園の優越を前提としている。このような見方を全面的に否定しはしないが、同時に、このような見方で割り切ってしまう

1) *As You Like It* からの引用は、すべて、A. Quiller-Couch and J.D. Wilson 編 The New Shakespeare 版による。

2) Sir Arthur Quiller-Couch, *Shakespeare's Workmanship* (Cambridge University Press, 1951), p. 95.

3) Caroline Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* (Cambridge University Press, 1971), pp. 278-9.

ない、複雑な、あるいは ambiguous な印象を感じないわけにはいかない。

「牧歌」は、元来、都会生活の爛熟に飽きた人々が、田園生活の中に「黄金時代」のごとき idyllic state of nature を見出し、その単純素朴な生活に対する憧れを、主として牧羊者に託して歌ったものである。追放された Duke の一行が「黄金時代の世のごとく、心を患わずことなく時を過している」(I. i. 112-3) Arden の森に、牧場を買って「羊飼い」になった Rosalind と Celia が登場すれば、「牧歌」の舞台は完成する。「牧歌」の主人公とも言えるこの Arden の森と宮廷との対照は鮮明なコントラストを描いているようだ。

Shakespeare は、まず第1幕において、都会と宮廷の悪と腐敗を客観的事実として提示する。そこでは正当なる公爵が追放され、兄は弟の財産を横領し、公正に闘ったレスリングの勝者が名誉を受けることができず、「ジャーノウの白鳥のごとく」(I. iii. 75) 離れ難い Rosalind と Celia の愛情さえ存続することを許されない。それは老僕 Adam をして

O, what a world is this, when what is comely

Envenoms him that bears it! (II. iii. 14-5)

と嘆かした邪悪な世界である。一方 Arden の森は、都を追われた人々に食と住と自由を与える避難所であり、恋の成就する愛とロマンスの世界である。Duke は Arden の森を賛美して次のように言う。

Now, my co-mates and brothers in exile,

Hath not old custom made this life more sweet

Than that of painted pomp? Are not these woods

More free from peril than the envious court?

...

And this our life, exempt from public haunt,

Finds tongues in trees, books in the running brooks,

Sermons in stones, and good in every thing.

I would not change it. (II. i. 1-4, & 15-8)

このように、Shakespeare は Arden の森と宮廷とを対置し、都会生活に対する田園生活の優越を示しているかのようだ。しかしながら、*As You Like It* において田園は一点の疑いもなく都会や宮廷に優越した価値をもっているのであろうか。森の生活を賛美する Duke の言葉にさえ、賛美とはうらはらな否定的印象を与える一面があるのである。事実 Arden の森には、悪天候とか 'icy fang' (II. i. 6) のごとき冬の風もあって、森の住人たちは 'the penalty of Adam' (II. i. 5) を免れるわけにはいかない。Duke 自身が森の生活を「逆境」だと考えていることは、'Sweet are the uses of adversity' (II. i. 12) という彼の言葉から考えても明らかであろう。彼にとって森の生活は、それ自体が快適で楽しいがゆえに価値があるのではなく、それが「我が身の何たるかを身にしみるように教えてくれる」(II. i. 11) からこそ価値あるものになるのである。これらの事実は、のどかで甘美な牧歌的雰囲気ではなく、逆に、Arden の森の無情さや厳しさを示唆するといってよいであろう。しかも皮肉なことに、篡奪者 Frederick の支配する envious court を逃れてやって来た Duke とその一行は、'native burghers of this desert city' (II. i. 23) を狩り立て、殺戮することによって森の調和を乱しているのであって、Jaques に言わせれば、Dukeこそ彼の弟以上の篡奪者だということになるのである。さらに、万人がすべて平等で、金も家柄も地位も無価値であるはずの理想郷アルカディアとは異なって、この Arden の森には 'the capitalist laws of hire'<sup>4)</sup>すら存在していることは羊飼いの Corin の言葉にも明らかである。

If you like upon report  
The soil, the profit, and this kind of life,  
I will your very faithful feeder be,  
And buy it with your gold right suddenly. (II. iv. 94-7)

4) Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary* (Methuen, 1978), p. 225.

一見したところ牧歌的理想郷のように見える Arden の森は、決して人類が夢に描いてきたアルカディアでも、万物が完全な調和の中にあるパラダイスでもない。Arden の森の本質は、

in respect of itself, it is a good life; but in respect that it is a shepherd's life, it is naught. In respect that it is solitary, I like it very well; but in respect that it is private, it is a very vile life. Now in respect it is in the fields, it pleaseth me well; but in respect it is not in the court, it is tedious. As it is a spare life, look you, it fits my humour well; but as there is no more plenty in it, it goes much against my stomach.

(III. ii. 12-20)

と述べる Touchstone の言葉が最もよく示しているのではなからうか。Arden の森の価値は相対的なものであって、見方によっては変り得るものなのだ。

価値の相対性は、もちろん、Arden の森に限ったことではない。上に引用した Touchstone の言葉は、同時に、宮廷や都市の価値が相対的なものであることを示唆している。悪徳や腐敗の渦巻く宮廷や都市も、見方や立場が変われば、Touchstone が言うように、「もっとましな所」(II. iv. 16) とも考えられるのである。というよりも、人は、都市にあっては田園の素朴を夢想し、田園においては都市の華美に（時には頹廢にすら）憧れるのだと言うべきかもしれない。安西徹雄氏の言う「ロンドンの二つの顔」もこのこと<sup>5)</sup>の別な表現だとも考えられるが、ロンドンのみならず、現代の日本についても（恐らくは古今東西を問わず）同じことが言えそう。暫時 Shakespeare から離れることをお許しただいて、次に引用するのは、朝日新聞に連載された山下惣一氏の「村に吹く風」と題するエッセイの一節である。

たとえば某月刊誌の中に描かれている大都市住民は——毎日農薬づけ

5) 安西徹雄『シェイクスピア』(大修館, 1978年), p. 64.

の野菜を食わされコンクリートの狭い家に住み、騒音、混雑、悪臭、事故の危険にさらされ、働いても働いても高い家賃とローンの返済、税金でがっばり搾取される。遊び場もない環境の中でサラリーマンになるしか道のない都会の子供たちは幼いころから受験地獄に投げこまれる——と、まるでこの世の地獄。対する地方、農村の方は——……無農薬の野菜を食べ、庭つきの広い家、何台もの車、緑につつまれ、おいしい空気、美しい人情。……家業をつげばよい子供たちはのんびり育っている——<sup>6)</sup>とこちらはまるで極楽。

山下氏は都会人の抱く都市と田舎のイメージをこのように紹介し、たまに田舎にやって来て田舎を賛美する都会人の身勝手な感傷を批判して言う。「そんな村が美しくみえるとしたら、都会の人たちは村の幻影をみているのだと思う。」3幕2場の Touchstone のせりふと山下氏の一文を読み比べてみると、complaint の内容に違いがあるにしても、また、詩的言語と散文的言語の違いがあるにしても、都市と田園についての認識のパターンには著しい類似があることに気づくであろう。

Arden の森の価値が相対的なものであるということは、都市や宮廷の生活に慣れたものが、「アダムの受けた刑罰」に耐えて、森の生活を受容するには人生の見方を変えねばならないということを示唆する。事実、Duke は、Amiens が

Happy is your grace,  
That can translate the stubbornness of fortune  
Into so quiet and so sweet a style. (II. i. 18-20)

と述べているところから察せられるように、価値観の転換に成功したのだと言えよう。もしそれができなかったら、彼にとって人生は苛酷な様相を帯びることになり、King Lear と同じ悲劇が生れざるを得なかったであろう。実際、この劇の発端は悲劇に転化し得る要因をもっているものであり、Jan

6) 山下惣一「村に吹く風」12『朝日新聞』朝刊(1983年6月19日)

Kott も指摘しているように、その構造は *King Lear* に酷似しているのである。

In another of Shakespeare's forests, four characters from *As You Like It* will pass through tempest and hurricane: the prince who has renounced his crown; the exiled minister; the exiled brother and the clown. They will be reduced to bare existence which must suffice for itself and in itself find reasons for being, as there can be no appeal from it, whether to the empty heavens, to bloody history, or to non-rational nature.<sup>7)</sup>

にもかかわらず、この劇を悲劇から喜劇へと転回せしめている最大の要因は、「Arden の森の魔力」というよりは、むしろ、Duke たちの価値観の転換にあると見るべきであろう。もちろん、「Arden の森の魔力」がこのような価値観の転換を容易ならしめたのだと見ることはできよう。だが、‘I would not change it.’ (II. i. 18) と述べる Duke の言葉は、彼が価値観を修正して、「アルカディアの住人」を演じるという決意を示したものだと考えられることのできるのである。真の理想郷であり桃源郷であるならば、その生活を続けることは、いわば自明の理であって、何人であれ、あらためて決意する必要はいささかもないであろうから。

Arden の森が伝統的アルカディアではなく、その価値が相対的なものだとすれば、それが宮廷や都市と対比されるとき、その優劣を単純に決めてしまいうけにはいかないであろう。Touchstone が都を ‘a better place’ (II. iv. 16) というだけでなく、Duke ですら、追放される以前の生活を ‘we have seen better days’ (II. vii. 120) というように、宮廷や都会の生活を better とする考え方もあながち無視できないのである。この点を、この劇に登場するロマンスの主人公たちについて考えてみよう。

*As You Like It* においては4組の恋人たちが登場するが、彼らは「牧歌」

---

7) Jan Kott, p. 222.

の登場人物にふさわしく、おおむね羊飼いかあるいはそれに準ずる森の住人である。すなわち、Phebe と Silviu は正真正銘の羊飼い、Audrey は典型的な田舎娘である。Rosalind と Celia は牧場を買って牧場主となり、従って Touchstone も 'shepherd's life' (III. ii. 13) を送らざるを得ない。Orlando は兄 Oliver によって「百姓のように」(I. i. 64) 育てられてきた。一人 Oliver だけが例外と言える。これら4組のカップルが繰り広げるロマンスは、様々な形で宮廷的あるいは都会的恋愛に対する批判となっている。

宮廷的恋愛 (courtly love) の倫理は、中橋一夫氏によれば、「中世騎士たちの間に理想化された倫理」であって、「武勇の誉を維持し、誓約を守り、君主に絶対服従するなどの諸徳は高貴な婦人の思いびととなるためには一身にそなえなければならない要件<sup>8)</sup>」であった。このような倫理から生れる恋愛観の特徴の一つは「極端な女性崇拜」であり、もう一つは結婚を目的とせず、姦通を理想とするということである。C. S. Lewis は宮廷的恋愛について

The sentiment, of course, is love, but love of a highly specialized sort, whose characteristics may be enumerated as Humility, Courtesy, Adultery, and the Religion of Love. The lover is always abject. Obedience to his lady's lightest wish, however whimsical, and silent acquiescence in her rebukes, however unjust, are the only virtues he dares to claim. There is a service of love closely modelled on the service which a feudal vassal owes to his lord. The lover is the lady's 'man'<sup>9)</sup>.

と述べ、利害関係による結びつきにすぎなかった封建社会の結婚制度と中世の結婚観から宮廷的恋愛が姦通を理想とするに至る次第を説明している。<sup>10)</sup>

結婚で終る Shakespeare の喜劇は、それ自体が、このような姦通を理想とする宮廷的恋愛を否定するものであり、そこにも近代的ロマンスを生み出

8) 中橋一夫『道化の宿命』(研究社, 1959), p. 5.

9) C. S. Lewis, *The Allegory of Love* (Oxford University Press, 1958), p. 2.

10) *Ibid.*, pp. 13-4.

した Shakespeare の思想的な立場が表われていると言えるのだが、*As You Like It* においては、このような宮廷的恋愛の伝統的作法を巧みに取り入れ、それを戯画化することによって、彼の思想を一層鮮明に示している。例えば、Rosalind に対する Orlando の態度は courtly love における knight の lady に対するそれにほかならない。まず、1 幕 2 場で Orlando は Rosalind に 'little strength' を授けられて Charles と闘い、これを倒してから彼女の首にしていた chain を与えられる。中世の騎士が貴婦人のスカーフを首に巻いて闘ったと同じイメージがここにはある。また、3 幕 2 場の Rosalind を称える詩には「極端な女性崇拜」がうかがわれる。ところが Ganymede に扮した Rosalind のほうは極めて理性的であり、恋にのぼせ上った Orlando を冷静に見つめ、時には彼をからかっている。恋人を得られなければ死ぬと言う Orlando に向かって Rosalind は、恋のために死ぬ男などいたためしはないし、まして恋人のしかめっ面は「はえ一匹殺すこともない」(IV. i. 107) と言い返し、永遠の愛を誓う Orlando に男の誓いの不実さを喝破する。

*Rosalind.* Now tell me how long you would have her after you have possessed her.

*Orlando.* For ever and a day.

*Rosalind.* Say 'a day' without the 'ever'... No, no, Orlando, men are April when they woo, December when they wed; maids are May when they are maids, but the sky changes when they are wives... I will be more jealous of thee than a Barbary cock-pigeon over his hen, more clamorous than a parrot against rain, more new-fangled than an ape, more giddy in my desires than a monkey: I will weep for nothing, like Diana in the fountain, and I will do that when you are disposed to be merry; I will laugh like a hyen, and that when thou art inclined to sleep.

(IV. i. 138-51)

いかにも才気に溢れる Rosalind の言葉は、男の誓いの不実さを喝破してい

るだけでなく、結婚生活の実態と女の性<sup>さが</sup>を生々と描き出しているように思われる。だが、女だけが姦通を厳しく罰せられた、いわゆる ‘double standard’ が厳存し、‘threats, blows and confinement to the house’ などによって夫への絶対的服従を強いられていたルネサンス時代の婚姻関係の実態<sup>11)</sup>を念頭においてこのせりふを読むとき、多くの批評家が指摘しているように、Shakespeare が創り出した Rosalind に「鋭い知性をもち、批判と諷刺の精神にも富み、それをもって中世ロマンスの愚」をはっきりと否定する「近代ロマンスの代表的人物」<sup>12)</sup>を見ることができだろう。

Phebe と Silviu の恋愛が courtly love のパロディであることは明らかだ。Silviu は、恋とは sighs and tears, faith and service, fantasy, passion, wishes, adoration, duty and observance, humbleness, patience and impatience, purity, trial, obedience からできていると言っているが (V. ii. 80-94), これらは courtly love の諸特質にはかならない。しかし、Silviu の宮廷風口説きは、Phebe が

Lie not, to say mine eyes are murderers!  
 Now show the wound mine eye hath made in thee.  
 Scratch thee but with a pin, and there remains  
 Some scar of it: lean upon a rush,  
 The cicatrice and capable impressure  
 Thy palm some moment keeps: but now mine eyes,  
 Which I have darted at thee, hurt thee not,  
 Nor, I am sure, there is no force in eyes  
 That can do hurt. (III. v. 19-27)

と言うとき、たちまち戯画化されてしまう。

Audrey と Touchstone の関係は、もはや恋愛と呼び得るかどうかさえ疑

11) Willystine Goodsell, *A History of Marriage and the Family* (Macmillan, 1974), Chap. VII.

12) 中橋一夫「喜劇」中野好夫・小津次郎編『シェイクスピア』(英宝社, 1960), p. 79.

わしいものである。Touchstone が Audrey と結婚しようとするのは、宮廷的恋愛とは似ても似つかぬ、ひどく散文的な動機からである。Touchstone は次のように言う。

As the ox hath his bow, sir, the horse his curb, and the falcon her bells, so man hath his desires; and as pigeons bill, so wedlock would be nibbling. (III. iii. 75-7)

彼の Audrey への求愛は、Hazlitt によれば、「その女に対して無関心であることによって愛の情熱への軽蔑を示す」<sup>13)</sup>ためであるが、それは宮廷的恋愛の否定を意味すると同時に、愛情よりも利益が優先し、女性の人格が認められていなかった、当時の結婚生活の現実を反映するものではなからうか。

以上に述べてきた3組の恋人たちは、Celia と Oliver の二人と共に、結局はめでたく結婚することになる。結婚を目的とする、あるいは結婚をもって終る恋愛は Shakespeare の喜劇における恋愛の特徴であり、また、宮廷的恋愛のアンチ・テーゼになっていることはすでに述べたが、ここでもう一つ重要なことは、彼らの結婚が Arden の森で成立しているという事実である。ここにもまた牧歌的思想、すなわち田園の都会に対する優越が示されているかに見える。がしかし、ここでもう一度、彼らの結婚の内容を検討してみる必要があると思われる。

Ganymede と Aliena は「羊飼い」であるが、森の魔法がとけると、たちまち宮廷人の Rosalind と Celia に戻ってしまう。Orlando は新しい公爵の地位につくであろうし、Oliver も宮廷内の高い地位を占めることは間違いない。本物の羊飼い、あるいは本当の森の住人と言えるのは、Silvius, Phebe および Audrey だけである。この中で、相互の真正な愛情に基づく結婚をするのは、Rosalind と Orlando, Celia と Oliver の宮廷人のほうであって、Phebe は自らの意志に反してだまし討ち同様に Silvius と結婚させられ、Touchstone と Audrey の場合は「取引」に近い、愛情抜き結婚

13) William Hazlitt, *Characters of Shakespeare's Plays* (Oxford University Press, reprinted in 1952), p. 252.

なのだ。このように見てくると、ここで賞揚されているのは宮廷人の結婚であり、決して田園人の結婚ではないと考えざるを得ない。

下層階級の人間が上流階級を意識的あるいは無意識的に模倣したとき、そこには諷刺とこゝけいの二つの効果が生れる。Phebe と Silviu<sup>s</sup> の恋愛がその好例で、前に述べたように、それは宮廷的恋愛のパロディであるが、ここでも模倣による戯画化によって、courtly love が諷刺されると共に、彼らの身分不相応な恋愛作法が、ロンドンおよびロンドン周辺の観客、言い換えれば都会人の笑いを引き起こしたに違いない。それは、いわば田舎者を笑ひ者にすることによって成立する笑いであった。ことに彼らのいささか間の抜けた恋のやりとりが Rosalind の洗練された知性と対比されるとき、都会人の優越は動かし難いものとなったであろう。

田園を賛美する「牧歌」はその性質上、当然、宮廷や都市に対する批判を含むものであった。As You Like It はこの意味における「牧歌」の性質を明瞭に示している。しかしながら「牧歌」は「羊飼いや農夫のような単純な人びとによって語られる形式になっているが、けっして彼らによって書かれたものではない。ましてや他の羊飼いや農夫に読ませるために書かれたものではない。それはじつは高級インテリ（当時は宮廷人）によって、他の高級インテリに読ませるために、素朴な人びとについて書かれたもの」<sup>14)</sup>である。Spurgeon はこの劇の imagery を分析し、ここに 'topical similes' が多く使われていることから、この劇が「高度に洗練された都会の観客を喜ばせるために書かれている」<sup>15)</sup>と結論しているが、このことは、Arden の森が必ずしも宮廷に優越せず、森の住人もまた都会人に優越しないという理由を説明するものと言えよう。

「牧歌」は、一方で宮廷や都会を諷刺しつつ、他方で宮廷人や都会人を喜ばせねばならぬという、ある意味で矛盾した、複雑な構造を本来もつものである。As You Like It における Arden の森と宮廷との ambiguous な、あ

14) 川崎寿彦『分析批評入門』（至文堂、1967）、p. 87.

15) Spurgeon, p. 278.

るいは矛盾した関係は、このような「牧歌」の特質にほかならないのでなかろうか。